

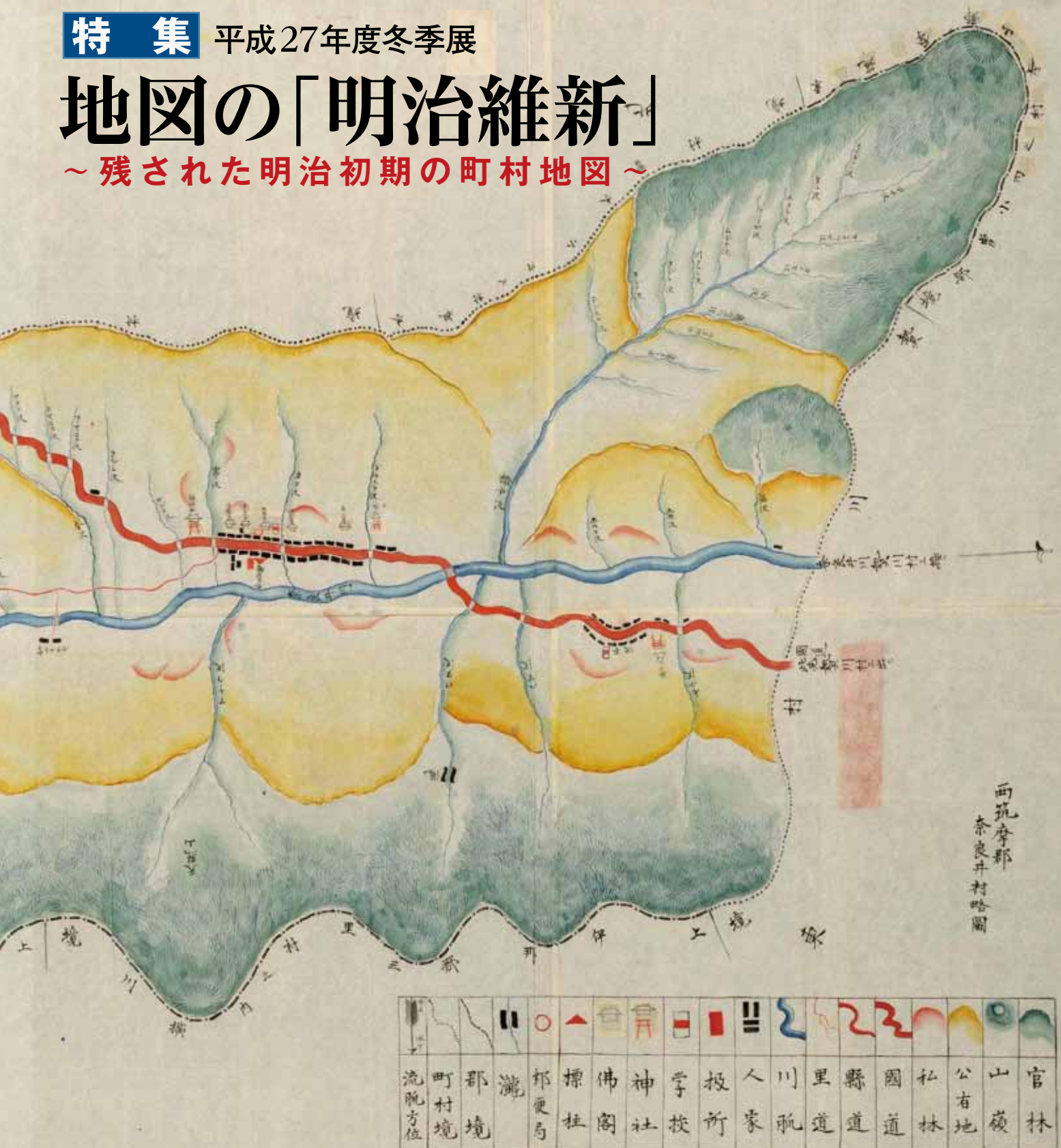
長野県立歴史館たより

2015年 **冬**号 vol.85

特集 平成27年度冬季展

地図の「明治維新」

～ 残された明治初期の町村地図 ～



平成 27 年度
冬季展

地図の「明治維新」

～残された明治初期の町村地図～

平成27年12月19日(土)
～平成28年2月28日(日)

※会期中一部資料の展示替えを行います。
前期:1月24日(日)まで 後期:1月27日(水)より

◆明治初期の地図

当館は、明治時代前期に作成された県内の絵図・地図を2,700点ほど収蔵しています。その中に、政府が進めた「皇国地誌」の編集にあわせて作成された町村の地図が670余点あります。

「皇国地誌」は、明治政府が新国家建設にあたり国土の把握を目的として、地域の地理・歴史・産業等を記した書として編集を計画したもので、地図が添えられることとされていました。

全国各地で地誌や地図が作成され、順次政府に提出されましたが、その後政府の方針変更により「皇国地誌」の編集は未完のまま中止されています。提出された原稿も、関東大震災に遭い大半が焼失し、「皇国地誌」はわからないことが多い史料です。

今回ご覧いただくのは、長野県で保管し、戦火を免れ今日まで伝えられた町村の地図です。

期間中、60点の地図を展示する予定です。これに3回の地図見学会を加えると100点ほどをご覧ください。

◆烏川村の地図の面白さ

地図の作成は、明治8年頃から本格的に始まります。当時、あまり細かなきまりはありませんでした。そのため、地域の情報を描く方法や地形を表現する技術などに、地域ごと村ごとの個性が表れています。

たとえば、烏川村(現安曇野市の一部)の地図(図1)には、測量に使ったとみられる補助線が何本も描かれています。建物は黒い小さな四角の記号で表し、川や水路も細かく描かれているところは現代の地図と似ています。

一方、右端(西方)には常念岳をはじめ「北アルプス」の山々が東から見た「絵」で描かれてい

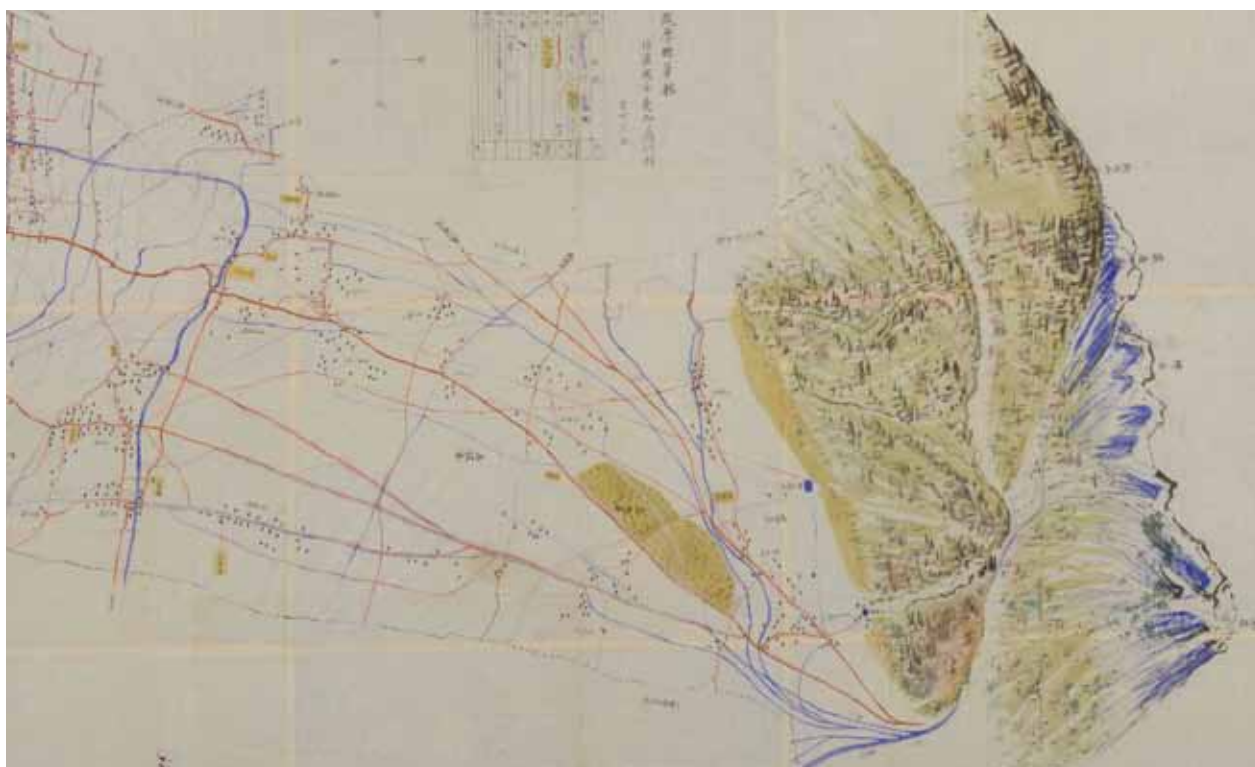


図1 南安曇郡烏川村(当館蔵/右方が西)

ます。村の主要部を上から見た図として描いているのに、なぜ山々は横から描いているのでしょうか。

「皇国地誌」の地図には、山の立体感を表す「等高線」は使われておらず、村ごとにさまざまな描き方が試されています。烏川村の地図を描いた人びとは、「最もわかりやすい表現」として、横から見た「絵」で表現したのかもしれませんが。屋根の形の端正な山容の常念岳は、安曇野で暮らす人なら一目でそれとわかる象徴的な姿です。このような例は、浅間山、八ヶ岳など地域の代表的な山々にもみられます。

◆あたらしい表現

「ケバ(毛羽)」とよばれる細かい楔形の線を使って、「上から見た形(平面図)」の中で山地の凹凸を表現しようとした地図もあります。上高井郡奥山田村(現高山村の一部)の地図(図2)は、細かなケバを用いた例です。この地図だけでなく全ての「皇国地誌」の地図に標高は一切記入されていません。現地を歩き、目で見て凹凸を記録し、等高線のようにみえるほど細かなケバで仕上げたものです。



図2 上高井郡奥山田村(当館蔵)



図3 「算法地方大成 量地之部 五」(和算の教科書／当館蔵)にある測量器具の挿絵

◆明治初期の測量技術

なかには、国土地理院が発行している地形図とピタリと重なるほどの地図もあります。なぜ、そのようなことができたのでしょうか。

江戸時代の信州では「和算(日本で発達した数学。図形や測量の分野もある)」という学問が盛んでした。明治初期の測量や地図作成は、このような土台の上で行われたようです。

「針盤(方位磁針)」(図3)は、和算の教科書に描かれた図です。会場に展示する地図には、方位を表す記号が描かれていますので、これと比べてご覧いただくと面白いと思います。

◆「皇国地誌」の地図

「皇国地誌」の地図は、江戸時代からの知識と技術を用いて描いた地図の最終段階のものです。全国の三角点網が整備される以前に、わが国独自の技術や知識で作られた地図群の魅力をお楽しみください。

「皇国地誌」の草稿と地図を対照して、さらに研究が進むことが期待されます。

戦後70年企画 「長野県民の1945—疎開・動員体験と上原良司—」を振り返って

7月25日(土)から9月15日(火)に開催した企画展は、小学生から高齢の方々まで、比較的幅広い年齢層の5,638名にご観覧いただきました。例年の夏季展より観覧者数は多く、関心の高さがうかがわれました。

あわせて実施した講演会、証言会、講座にも536名の参加をいただきました。さらに、観覧にあわせて、関連したミニ講座の開催を要望される小・中学校や公民館の団体が多かったのも今回の特徴です。このほか、要望によって、小学校に向いて隣接した戦争記念碑の前で歴史館見学の事前学習も実施しました。

アンケートに寄せられた展示に対する感想を紹介します。

- 夏には毎年戦争のことについて企画展をやっていただきたい。(20代 女性 県内)
- 不謹慎かもしれませんが、とても興味深かったです。自分は戦争を経験したことがないので、当時のことをもっと知りたいと思いました。(20代 女性 県内)
- 殊に、上原のことをより知りたくて訪ねてきました。長野県の戦争時の様子を知ることができ、とても印象的、感謝です。(70代 男性 県外)

- とても興味深い展示で、とても良かった。

(中学生 男性 県外)

- 戦後70周年になり、戦争体験者も少なくなってきた。今、若い私たちに、戦争の残酷さを伝え、平和を保つために、このような企画をもっと行ってほしいです。(高校生 女性 県内)

- 泣けました。(30代 女性 県内)

- 戦争を振り返るといろいろなでき事があるが、特攻について上原さんだけではなく、他の長野県の方も取り上げて良かった。企画全体が特攻でも良かったのではないかな。

(50代 男性 県内)

- 涙が出ました。(80代 女性 県内)

- 「戦後は終わった」と昭和30年代初頭に宣伝された。しかし決して終わっていない。

(60代 男性 県内)

- 普段知ることができないことを知ることができてよかった。うるっときました。

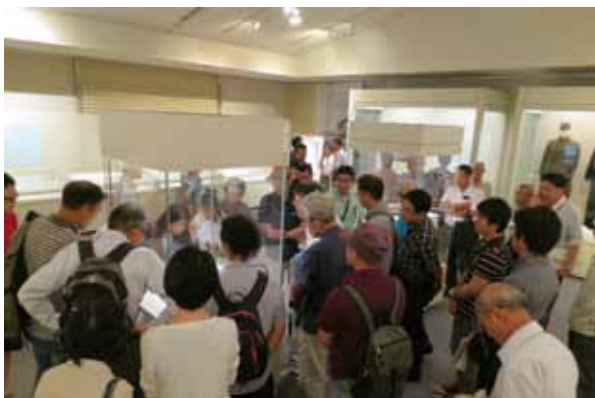
(高校生 女性 県内)

- 長野県は疎開先にもなり、県民は次々に招集され、県として大変だったかなと感じました。

(中学生 女性 県外)

- 戦争の企画展をもっとお願いします。

(30代 女性 県内)



常設展特別コーナー「真田氏 戦国乱世をかけめぐる」

平成28年のNHK大河ドラマ『真田丸』では、^{のぶしげ}真田信繁(幸村)が主人公として登場します。当館では、平成27年11月より平成29年3月まで、5期に分けて真田氏についての展示を行います。

名も知られぬ弱小の時代から、戦国乱世を生きぬき、大名となって幕末を迎えるまでの真田氏の姿やその時代の一端をご覧ください。5期の構成は次の通りです。



砥石城・米山城絵図 (当館蔵)

第1期 真田氏の登場〔16世紀中期〕

真田氏は小県郡の真田(現上田市真田町)を発祥の地とする土豪で、^{うんの}海野氏の一族といわれます。真田^{ゆきたか}幸隆は武田^{しんげん}信玄の家臣となって、上田^{とし}原や砥石城などで村上^{よしきよ}義清らと戦いました。

第2期 戦国乱世と真田氏〔16世紀後期〕

幸隆とその子^{まさゆき}昌幸は、上杉^{けんしん}謙信との戦いを中心に、武田信玄の家臣として活躍しました。しかし、武田氏滅亡後は、織田・北条・徳川・上杉・

豊臣と様々な関係を結びます。そして、上田城を築き、東信濃随一の武将に成長しました。

第3期 天下分け目の戦^{いくさ}と真田氏

〔17世紀初期〕

関ヶ原の戦いにあたって、昌幸と信繁父子は石田方(西軍)、信繁の兄^{のぶゆき}信之は徳川方(東軍)に分かれて戦いました。大坂の陣では、信繁は豊臣方に味方し、「真田丸」と後によばれる陣地を築いて家康に挑み、夏の陣で討ち死にしました。

第4期 上田から松代へ〔江戸時代〕

大坂の陣が終わって徳川の世になると、信之は上田藩主となりました。その7年後、松代へ^{いほう}移封となり、真田氏は明治初めまで松代藩主を務めます。

第5期 真田三代〔江戸時代以降〕

江戸時代、太平の世になると真田三代の活

躍が読み物に書かれ、信繁は幸村という名で登場しました。明治時代には、^{こうだん}講談や立川文庫の作品で真田十勇士らが創作され、^{にしきえ}錦 絵も描かれ、真田氏の人気がいっそう高まりました。



「真田・木村・後藤三将之図」部分 (当館蔵)

展示の予定

期	開始予定	主な展示資料
第1期	平成27年11月	松尾城・砥石城・岩尾城の図、刀剣「信州住藤原信咎」、脇差「信咎」
第2期	平成28年1月	「信州川中島合戦図」、岩櫃城・沼田城の図、「真田秘伝記」、火縄銃
第3期	平成28年5月	「関ヶ原合戦両軍布陣図」「大坂夏陣・冬陣之図」、真田信之の朱印状
第4期	平成28年9月	上田藩主・松代藩主画像複製、上田城・松代城の図、「松代祭礼絵巻」
第5期	平成29年1月	「真田三代記」「真田家略記」「御系図」「真田・木村・後藤三将之図」

松原遺跡出土の赤色漆塗り豎櫛

発掘調査と保存修復の
共同成果 (その3)



写真1 豎櫛の出土状況

平成2年(1990)の夏、県埋蔵文化財センターが発掘調査していた長野市松原遺跡の河川跡から、弥生時代中期(2000年前)の土器片などとともに鮮やかな朱色の漆塗り^{たてぐし}豎櫛が出土しました。寸法は、全長156mm、最大幅56mm、厚さ6mmです。豎櫛は、櫛の柄や歯並びが縦長で、主に縄文時代から古墳時代に作られたものです。本例は中でも大型の部類に入ります。

この豎櫛は、櫛歯部分が著しく劣化しており、水浸けの状態を観察や記録をおこなわざるをえませんでした。ただ、肉眼観察のみでは、取扱い方が難しかったので、地元の医院にレントゲン撮影をお願いしました。当時、県にはまだ分析機器、施設がなかったからです。撮影の結果、櫛歯の竹棒24本が赤色漆塗りの柄の内部全体に

整然と伸びており、うち8cm分の取手部分は細い紐^{ひも}で丁寧に編み込まれていました。この細やかな技術をしっかりと保存できるように、まず強化剤に浸け込むことで櫛の変形を防ぎ、その後に破片接着という修復方法を選択しました。

それから25年が経過して、昨年導入した透過X線デジタルセンサーにより再び観察を行ったところ、新たに以下のことが、判明しました。ひとつめは、紐の編み方です。24本の竹棒に、緯糸状の細い紐を竹棒2本ごと、カゴを編むように交差させて、両端の竹棒で百数十回折り返していました。しかも、竹棒がほぼ一定の角度で広がるように、紐の編み目の段数を調整して末広がりにしています。そこにはこの櫛を作った弥生時代人の手先の器用さと精緻な技術が見て取れます。ふたつめに、竹棒と紐の編み物に赤色漆が丁寧に塗り込まれており、目地や隙間にもしっかりと充填し、櫛柄部の強度を保っていたようで、漆は表面の見栄えだけでなく、強化材の意味ももっていたようです。

この豎櫛は、まず出土時の形状を忠実に保つ修復を行いました。そして、後になっても観察、再修正が可能であるように最小限の修復を選択しました。出土から25年が経ち、今回の高精細な観察の結果、今まで不明だったこの豎櫛の緻密な構造の解明がまた一歩前進しました。

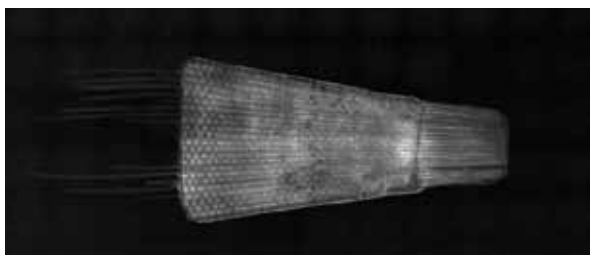


写真2 X線画像 2015年9月15日撮影
柄部の白い部分は漆が充填されているため、X線の透過量が少ない。

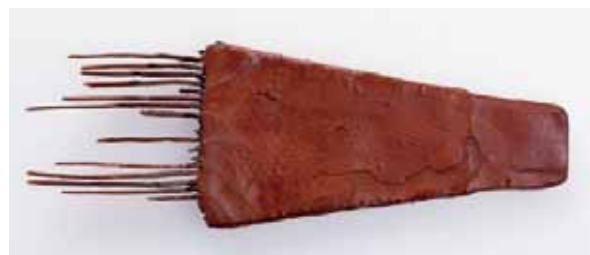


写真3 保存処理後の豎櫛

松代天王祭を描く

長野市松代町は、真田十万石の城下町として発展してきました。《信州松代祭礼絵巻》は江戸時代の「^{まつしろてんのうまつり}松代天王祭」を描いたものです。「天王祭」の起源は諸説ありますが、もともと悪疫よけの神、牛頭天王をまつる夏祭り、祇園祭りとともによばれています。



図1 能狂言の山車

松代天王祭は、松代町東条の池田宮（^{たまよりひめのみことじんじや}玉依比賣命神社）の牛頭天王を迎えて行われます。松代には町が8つ（中町・伊勢町・^{かじ}鍛冶町・^{こうじん}荒神町・^{こんや}紺屋町・^{ばくろう}紙屋町・^{さかな}馬喰町・肴町）ありますが、祭りの日や内容は8町寄り合いで決められたといわれています。祭りの2日間は、松代町民だけでなく、町外からも見物客が訪れ、藩主や藩士も参加しました。8町が、それぞれ山車や舞台を出し、乗馬なども行われ、祭りのクライマックスでは、松代城の^{おおごもん}大御門前で^{おおもんおどり}大門踊が行われました。

この絵巻を読む

絵巻は17mを超える長さの大作で、行列や見物人などが描かれています。行列には、鎧に身をかためた武士の行軍や、舟、^{ふたまただいこん}二股大根の張りぼてなど珍しい山車もあります。いくつかの出し物を見てみましょう。図1では、山車の上に舞台が作られ、能狂言の様子が見られます。図2は、「大門踊」の様子です。「大門踊」では、肴町の衆が杉山という、杉の葉で作った山を車に乗せて引いていました。明治初期の^{あまかざり}《尼巖城下町絵図》の添書によると、大門踊は肴町に来ていた越後のいわしを売る女たちが肴町の町人たちと共に大門前で踊ったことがはじまりとされています。

この絵巻の作者は^{も ぞん}茂尊（詳細不明）。74歳の作です。制作年月日は天保4年（1833）巳10月5日とあります。8代藩主、^{ゆきつら}真田幸貫の頃です。この頃の松代領は不順な天候が続き、農作物に大打撃を受けていました。盛大な祭りのにぎわいは、厄除け祈願でもあったことでしょう。

（紙本彩色 縦245mm×横17,842mm）



図2 大門踊



■2015年(平成27)11月～

2016年(平成28)3月の行事予定

11月

秋季企画展

講座・イベント

休館日
2・4
9・16
24・30

樹木と人の交渉史

～発掘された木製品、
樹木信仰にみる3万年の歴史～

10 / 3(土)～11 / 29(日)

やさしい信濃の歴史講座
in松本①(松本市立博物館)
11 / 21(土)10時30分～12時
「道が結ぶ夢～『善光寺道名所
図会』の魅力～」
(青木隆幸)
「旅人・文化人・登山客の憩い
の場～浅間温泉～」
(金澤大典)

近世史セミナー
11 / 28(土)
「災害に向き合う地域社会」

12月

冬季展

休館日
1・7
14・21
24・27
28・29
30・31

地図の「明治維新」

～残された明治初期の
町村地図～

12 / 19(土)～2 / 28(日)

■講演会
12 / 19(土)13時30分～
「どう変わった 絵図から測量図」
講師 山浦直人氏(新潟大学非
常勤講師・工学博士)

■パネルディスカッション
1 / 16(土)13時30分～
「地図が語る明治期の測量と作
図」
コーディネーター: 山浦直人氏
パネラー: 伊藤敏氏、溝口貴氏、
増沢延男氏(一般社団法人長野
県測量設計業協会 会員)

■講座
2 / 13(土)13時30分～
「全国有数の地図アーカイブを
読み解く」
講師 遠藤公洋

■地図見学会
1 / 10(日)13時30分～
1 / 30(土)13時30分～
2 / 21(日)13時30分～
「公開 お宝の地図」

やさしい信濃の歴史講座
in松本②(松本市立博物館)
12 / 5(土)10時30分～12時
「文化財を生かした地域づくり
～景観を切り口に～」
(遠藤公洋)
「昭和戦前の信州観光」
(原 明芳)

やさしい信濃の歴史講座
「大地に刻まれた信濃の歴史」

①12 / 12(土)13時30分～
「信州黒曜石物語～信州黒曜石
原産地と遺跡～」
(大竹憲昭)
「シナノの古墳時代 北・南」
(西山克己)

②1 / 9(土)13時30分～
「武士にも庶民にも信仰された
諏訪大社と御柱」
(畔上不二男)
「信州の学海に立つ安楽寺八角
三重塔」
(徳高隆治)

③1 / 23(土)13時30分～
「木曾川の水力発電所」
(林 誠)
「遺された戦争の記憶」
(原 明芳)

④2 / 6(土)13時30分～
「学校をつくった人びと
～麻績学校・日新館～」
(市川 厚)
「政治の基本は人づくり おら
が村にも学校を～開智学校・屋
代学校」
(宮本 博)

⑤2 / 20(土)13時30分～
「近代の郡役所と地方自治」
(金澤大典)
「科野国伊那評から信濃国伊那
郡への移行を考える」
(上郷考古博物館・市澤英利氏)

⑥2 / 27(土)13時30分～
「長野県の近世城郭」
(中野亮一)
「戦国の城が終わるとき
～貞田氏に關わる城を窓口に～」
(遠藤公洋)

⑦3 / 5(土)13時30分～
「何が通った? 安曇野をつな
ぐ道
～江戸時代の食を中心にした流
通～」
(豊科郷土博物館・矢口友美氏)
「女たちは善光寺をめざす
～江戸時代の旅と宿場～」
(青木隆幸)

1月

休館日
1・2
3・4
12・13
18・19
25・26

2月

休館日
1・2
8・9
12・15
22・29

3月

速報展

長野県の遺跡発掘 2016

3 / 12(土)～6 / 26(日)

休館日
1・2
7・14
22・28

表紙の写真の解説

奈良井村略図(部分) 当館蔵

明治8年(1875)～19年(1886)に作成されたとみられる奈良井
村(現塩尻市)の地図で、中山道奈良井宿周辺を描いています。

中央を横切る赤い太い線は国道です。細かな沢まで丁寧に描か
れているのが、木曽郡の村に共通する特色です。

行事アルバム



巡回出前講座「やさしい信濃の歴史講座in上田」

8月29日、「やさしい信濃の歴史講座」の巡回出前講座を、上
田市立信濃国分寺資料館で行いました。地元の方を中心に多数
の聴講をいただきました。講座の開催場所を県内各地に拡大し
ています。



博物館実習

8月25日～9月4日の10日間、大学生8名が2週間の博物館実
習を行いました。学芸員の仕事に触れ、博物館の役割について
体感する実習です。資料の取り扱い、遺物や古文書の整理、展
示解説などの実習に取り組みました。



出前授業

9月4日、当館職員が長野市内の小学校で出前授業を行いま
した。6年生を対象に、学校の近くにある石碑や像の由来など
の説明をしました。当館ではご要望にお応えする形で学校支援
を行っています。お気軽にご相談ください。

長野県立歴史館たより 冬号 vol.85

2015年(平成27)11月20日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ http://www.npmh.net/

印刷 富士印刷株式会社